

女性の研究集会 議事録
1993年10月22～24日

出席者

じけい ジーン バンキエ
たし リンダ ベイラー
きうん ジョーン ブロック
露光さん シェリー シャイアト
しうん ヴァレリー フート
れいほう エレン マイアー
フランシス ペリエロ
かんぜ エリザベス ロバート
くおん マーシャ スピッツ
じうん イワ タラセウィッツ
こち キャシー ウッドワース
じよしん マーシ ジース

金曜日の夜出席者達は、DBZの宿坊に集合、えしん ブレンダ ルークマン、あげつさん、
■■■■ ■■■■ によって書かれた手紙のコピーが手渡され、研究会出席者全員に心づくしの贈
り物が進呈された。非公式の夕食が宿坊で出され、随意による坐禅が禅堂で行われた。

土曜日の朝、随意による朝の礼拝、坐禅、食事、朝の会議が禅堂で行われた。更に、研究会
出席者のみによる坐禅が宿坊内の禅堂で行われた。

討論は二回に分けて行われた。最初の討論会が始まる前に、くおんが討論進行上の規則を説
明した。全員、それぞれの持論に関わり無く、完全に開放的であることが奨励された。他
の出席者に対して礼儀正しく寛容である事が要求された。全出席者は、この会議で発言され
た事はすべて機密で、これに協力する旨同意した。フラン ペリエロはこの集会の書記を勤
める事、議事録のコピーを出席者全員に郵送する事を依頼された。■■■■ は三項目の論文、
（即ち、“禅師とセックス：悟りに関する規準の呼びかけ” “地位の乱用と戒律” “ダー
マサラ会議”）を全出席者に配布し、これを読むように勧めた。

師弟間の信頼と、女性修行者の責任が討論された。くおんと露光さんが司会者的役割を勤め
た。

見解／懸念／疑問について、一人又は複数の出席者によって表明された：

- 老師と交渉を持った多くの女性達は、この経験により打撃を受け、一部の者はこの状態が何年も続いた。 老師はこのような関係の結果、女性達と異なり無影響のようである。
- 老師の“彼女等を愛し、彼女等を捨てる”と言う性癖は有名である。
- “無知”と“悟道”の行為の境界線はなにであろうか？
- その人の行為の結果を見て、その行為の性格を推測する事は可能であろうか？
- 老師は他の皆と同じ人間でありながら、我々よりも厳しく審査されている。
- 1967年、1975年、1979年、1982年、1986年、1993年、大勢の非常に有能な人びとが寺を去った、僅かに残った者は修行を積んだ弟子ではなかった。
- 退去した者のうち、一部の者は戻る意思があったのであるけれども、師弟間の情事が行われやすい状況下にあるZSS施設内での修行は安全ではなく／又、不可能であった。
- 他の人びとは、これほど度重なる事件があった後、もはや回復は不可能であろうと思った。
- 人びとは “止めて欲しい！”と老師に切望した。 この望みは、慈悲心と感謝に基礎を置いている。
- このスキャンダルは僧伽と個人にとって、最も打撃的だった。
- 人びとは、会員などいくらでも代わりがやって来るという老師の見解と、自分で犯した罪の償いをしようとする些かの試みも見られない老師の態度に失望した。
- 彼に同調しない人に向かって“出て行け”という態度は傲慢であり、受け入れる事が出来ない。
- スキャンダルは全ての人びとを傷つけた - 女だけではない。
- 老師の女に言い寄る態度は精神的未熟さ、軽卒、不安定の表示である。
- 老師の自分でもコントロールの出来ない常用癖は治療しなければならない。
- 多分、老師が一部の女性に愛情を示す理由は、彼女等が暖かさ、親切に飢えていると感じたからである。
- 老師は公案の師としては秀でてはいるけれども、戒律には強くない。
- 老師の行為、生活態度は仏教の僧としての概要を示していない。
- ダライ ラマは、大衆の評価する所、非常に“倫理”を重んじ、慈愛に満ちた師であるという。 彼の場合は老師よりも簡単に戒律を守る事が出来ると一部の人びとは思っている。 なぜならば、彼は常に多くの僧や尼僧に囲まれて暮らしており（と言う事は、彼には悶着を起こす機会が無い）老師にはそれがある。
- 日本では、尼僧には結婚が許されておらず、僧には許されている。 男女の交わりは常に侍者によって注意深く観察されている。
- 老師は孤独な人間であり、彼の全生活は（所謂、旅行が多い）困難である。
- 彼は悟りを開いた人間かもしれないが、行動にそれが現れていない。
- 弟子は（特に新参の）不安定な状態にあり、彼らにとって禅マスターは神のような存在で、決して意識的に人を傷つけるような事はしないと知っている。
- 禅には異国文明の畏が多く見られる。 これにより人は混乱に落ち、とくに新参の弟子はこれを経験する。 なぜならば、彼等は修行上、何が“妥当”であり、何がそうでないか分からない。
- 禅で使用されるすべての宗教的儀式は、師と弟子の距離をさらに広げる。
- 老師は弟子達から孤立しており、権力がありすぎる。
- 老師と愛法さんは弟子達が互いに話し合うことを好まない。 彼らは全てのものに“秘密の被い”を掛けておきたい。
- “破廉恥”な師は地位の乱用のため、日本人の方式を利用する。 独参室はその一例である。
- 老師と愛法さんは、師弟関係の公式討論は面子を傷つけると知っている。

- 日本の文化が修行上大いに影響している。 アメリカの弟子達はこれを問題視するが、老師と愛法さんはそう思っていない。
- アメリカ人は率直で全面的に公表する事を好むが - 日本人は微妙である。
- 時々老師は自分も被害者であると思っている。 全ての禅マスターに伴う神秘性は、一部の女性にとって魅惑的である。 一部の女性達は彼の前に身を投ずる。
- たとえ女性が密通を仄めかしても、それを実現させぬよう計らうのが老師の義務である。
- 老師が女性に誘いをかけ、その女性が-拒絶-した実例で、その結果老師は師である事を拒絶したが、この経緯に誰も気付いていない。
- 師弟間の問題は更にもっと深刻な問題に至る前兆である。
- 老師は彼の問題を正すために態度を改めようとしない。 彼は彼の行為の責任をとる事を拒絶している。
- 老師は彼自身に問題があることを認めない。
- 観念論を放棄しなければならない。
- 教えは驚くべき形態を取る。 時には老師の過ちの方が、彼の功績よりも学ぶ所が大きい。
- 事件に関わり無く、一部の人は相変わらず老師を師として仰いでいる。
- 老師は詐欺等他の悪癖を持っており、非常に多くの苦痛と損害をもたらした。
- 老師は人を誤摩化し、信頼を裏切る人物として風評が高い。 このため、一部の人びとは彼から離れて行く。
- 老師は指導者ではなかった。 巡法のある種の不法行為を止める事を拒絶した。
- 巡法の不法行為と、又老師がその彼を嗣法に選んだ事は、多くの人びとに幻滅と怒りを与え、その結果多数の人びとは二度とDBZを訪れる事を望まず、ある者は永久に去った。
- 巡法にも女性問題があったが、彼の場合は、老師の場合よりもオープンであった。
- 禅スタデイ ソサイエティに長期滞在者はいない。
- アメリカの禅はセックス、麻薬、金銭問題等の悪評が伴う事で有名である。
- 禅の世界は全面的に男性によって実権が握られている。 女性は平等に扱われておらず、組織体系の下部に置かれている。
- 老師は女性を男性と比較して差別扱いしていない。
- 師弟間の情事は女性老師が増えれば、減少するであろう。
- 沈黙により全てが解決するならば、全ては幻影と言うことになる。
- 理事会による倫理規制は、この組織にとって長い間待ち望まれた事であった。
- DBSと正法寺において、接心の注意事項として是等の規制事項を読む事が望ましい。
- 理事会はもっと行動的であって欲しい。 理事会は老師の前に十分立ち上がっていない。
- 本年の理事会は非常に行動的であり、理事達は僧伽のメンバーがどのように感じているかを大切に思っている。
- 宋淵老師は栄道老師に問題がある事を知っていながら、善処のための効果的な処置を何ら行わない。
- 一部のアメリカの禅師達は、老師の行為を問題視しているが、態度が希薄で、団結が見えず、事件に対して発言する所迄は行っていない。
- 師を増やし、老師だけが師ではないと言う事を表示すること。
- 接心には老師を同席させない事。
- バイロウズ条令は、禅スタデイ ソサイエティを民主的にするために、変更すべきである。 現在の条令では余りに独裁的で何か事件が起きても誰も口出し出来ない。
- 少々の問題を修正するために、全面的ぶち壊しをする必要は無い。 既にある体制の外殻を効果的に利用すれば良い。

- 禅スタディ ソサイエティの施設を訪れる全ての女性は予め老師について注意を受けるべきである。
- 老師は弟子からも学ぶ意思がなければならぬ。 老師は成長する事を拒絶している。
- 改良、改正の示唆があると、老師はこれを人びとが彼の権力を取り除こうとする策謀ではなかろうかと邪推し、有り難いとは思わない。
- 悟りを開いていない人物が、他の人びとに何を如何にするべきかを語ることは問題である。
- 老師は時々人びとや又彼らの動機を誤解している。
- 陵辱行為を正当化するために、当所ではなにも審査すべきことがなく、審査する人もいないと言う論法が用いられて来た。

上記に述べられた項目に付いて長時間討論が交された後、グループは以下の結論を得た。

- 1. 新参の弟子、又は従来の子達に、ビッグ シスター/ビッグ ブラザー指導プログラムを作る。
- 2. 理事会員に年一回の僧伽討論会を開くよう呼びかける。
- 3. 組織がもっと民主的/アメリカの模範となるようバイロウズ条令を変更する。
- 4. “女性のみ”又は“古参の者のみ”の接心を老師無しに宿坊で行う。
- 5. 他の禅センターの模範となるようにする。
- 6. 僧伽の責任/義務。

午後の討論が終わり、出席者達は非公式の夕食を宿坊で楽しんだ。 夜の座禅と禅堂に置けるルイス ノードストロムによる法話は随意であった。

日曜日の朝、禅堂で随意による朝の礼拝と坐禅、朝の会議が開かれた。 集会出席者のみによる坐禅が宿坊で行われた。

グループは恐怖について討論。 きうんが司会者の役を勤めた。

見解/憂慮/質問が一人又は複数の出席者によって表明された。

- DBZの全ての女性が出席しないのはなぜだろうか? 彼女等は老師や愛法さんの罰が恐ろしいのだろうか?
- 集会に出席した一部の人は、出席のためにどのような勇気を要したかと質問を受けた。
- 多くの人びとは、大なり小なり老師や愛法さんに恐れを抱いている。
- 人びとは老師が二度と女弟子を誘惑しないと語る言葉を聞いたが、信用出来ない。 彼らは老師が又誘惑を再開するであろうと恐れている。
- 組織内で、互いの信頼は皆無で、この治療は難しい。
- この組織は、老師が退職するか去る迄、変化は期待出来ないであろうと言う恐れがある。
- この研究会から何も成果は無かろうという恐れと、誰も私達の憂慮を重要視はしないであろうという恐れがある。

この問題について問答が交換された後、グループはこの研究会の締めくくりとして、どのような形式で提示したらよいか(もしそのようなものがあるとなれば)相談した。 討論の結果多数決で、手紙を書く事に決まった。 文書は老師、理事会、僧伽宛に、討論された概要を書き送る事になった。 手紙はDBZにおいて制作され、タイプで清書され、全11名の署名を添える事。

くおんが手紙を投函する事、更に、DBZと正法寺の理事会の掲示板に手紙の複写を展示して、僧伽のメンバーに読んでもらう事が同意された。

研究会終了後、出席者は閉会式を行い、経を読み、坐禅をした。 随意による非公式の昼食が宿坊で出された。

全出席者は午後退去。